

ライマン 雑記

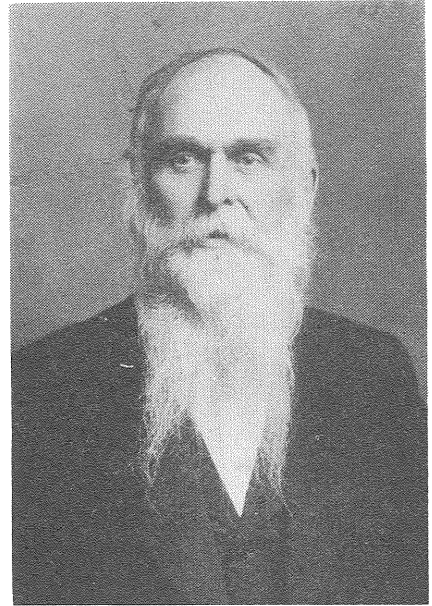
副見 恭子¹⁾

1. 来 日

1920年(大正9年)8月31日付「ニューヨークタイムズ」は、著名な地質学者、最初の日本地質調査をした鉱山技師の見出しで、ベンジャミン・スミス・ライマン(第1図)の死去を報じている^{注1)}。この「タイムズ紙」「アメリカ名士録」及び「科学人名事典」は、ライマンの来日の年を1873年(明治6年)としているが、日本の資料を調べると、佐藤博之氏^{注2)}が「(ライマンの)明治6年1月来日は井黒(1968)の公文書調査によって確認されており」と「ライマンとナウマン百年史の一こま⁽³⁾」に述べている以外、明治5年説が圧倒的なのは何故なのだろうか?。

ライマンの残した明治5年10月4日から明治6年8月16日の書簡コピー綴りのおかげで、彼のサンフランシスコ出発、来日、江戸到着の日付けが明らかになった。即ち1873年(明治6年)1月18日タムソンホテルから黒田清隆に宛てた書簡、1月22日ノースハンプトン市判事、父サミュエル・ライマンへ書いた手紙、綴り147ページに綴じ込んだニューヨークから芝、江戸までの旅費リストの三つの資料からである。サンフランシスコ出発は1872年(明治5年)12月17日、当日ライマンは、ホテル代8ドル、ホテルポーター50セント、汽船アラスカ号までの馬車代1ドル出費として記入している(第2図)。一生を通し筆まめ、いや筆マニヤだったライマンは15日と16日、二日間サンフランシスコのグランドホテルで、肉親、知人に7通手紙を書いた後、しばらく筆を絶ち、次に筆を取ったのは、翌年1月2日父への手紙だった。右上隅、普通差出人の住所を書くところは、汽船アラスカ号、サンフランシスコと横浜の中間で、となっており洋上でサンフランシスコに向かう汽船コロラド号に託したもので、サンフランシスコ出発12月17日を裏書きしているとみてよい。

旅費リストによると、12月17日後の出費は、明けて



第1図 B. S.ライマン

1873年(明治6年)1月17日で汽船スチュワードに5ドル、航海を終え謝礼チップに違いない。翌18日は、サンパンと荷物50セント、荷物クーリー鉄道まで1ドル、江戸まで鉄道荷物3ドル、切符1ドル85セント、江戸ホテルまで馬車メキシコ銀1ドル、ライマン江戸到着の様子が、まざまざと目に浮かぶ。ここで一つ歴史的事実を認識していただきたい。太陽暦が採用され明治5年2月3日が明治6年元旦になったことである。ライマンの弟子でさえ明治5年ライマン来日と信じたのは旧暦から新暦の変遷による混乱が起因したのではなからうか。

ホテルに着くと、急ぎ黒田清隆へ左記の手紙をしたた

注1) ブレックとバンベリーの北海道地質測量は1862年(文久2年)である。

注2) 地質ニュース 1985年9月号 373号38ページ

1) マサチューセッツ大学顧問
8 Eaton Court, Amherst MA 01002, USA

キーワード: お雇い外国人, ライマン, 来日

Expenses of January from Mr. W. H. B. Smith, Esq.

1771	45 Cents Steamer passage from America to Yokohama	45 Cents
4	Rail Road fare from Yokohama to San Francisco	6.00
7	Baggage F.R.R. 175 - Extra baggage Philadelphia to San Francisco	7.50
8	Breakfast 100 - Dinner 100 - Supper 100	1.05
9	Sleeping car ticket - Round Trip - Port to Omaha	2.00
9	Dinner 75 - Supper 75	1.50
10	Breakfast 75 - Sleeping car ticket - Omaha 1.00	2.75
16	Extra baggage Omaha to San Francisco	15.00
16	Breakfast 100 - Dinner 100	2.00
16	Breakfast 1.00 - Dinner 1.00	2.00
16	Rail Road ticket from Omaha to San Francisco - Sleeping car 1.00	6.50
16	Dinner 1.00 - Supper 1.00	2.00
16	Dinner 1.00 - Supper 75 - Baggage Expense 1.00	4.75
	Grand total of 113 of January	189.10
14	Carriage ticket from Port to San Francisco	1.50
17	Rail Road ticket from San Francisco to Port - Hotel 50	5.50
17	Carriage to Steamer 1.00 - Dinner at Steamer 1.25	2.25
17	Dinner before Steamer	1.00
11	Baggage and baggage fee - Extra baggage F.R.R. 1.00	1.50
13	Extra baggage on F.R.R. 1.00 - Ticket 1.00 - Baggage 1.00	3.00
14	Rail Road ticket and baggage (San Francisco)	6.00
		445.25
	Provision of 17th Steamer from San Francisco	7.00
	W. H. B. Smith, Esq. San Francisco	1871

Wm. Kenoda
 Keelans to Government of Japan
 Department Keelans

Dear Sir,
 I have the honor to inform you that
 according to agreement with Mr. Smith, Chairman
 of the Board of Directors, I have just received
 the order to place myself at your service
 as a permanent Keelans. I should be glad if you
 will write without delay, and advise me
 of the terms of my appointment. If you desire it, I will
 call upon you whenever you please at a personal
 interview.

I remain, Sir, your obedient
 servant,
 Wm. Kenoda
 Keelans

第2図 1872年12月4日から1873年1月19日までの会計リスト

第3図 黒田清隆あて書簡

ワシントン辦理公使森注³⁾との契約に依って、開拓使勤務のため只今江戸に到着したのをお知らせいたします。遅滞なく仕事を始めたたく貴下の御指令を待っています。もし御希望なら、ご都合のよい折、参上いたします。

謹言
 ベンジ・スミス・ライマン
 1月18日 1873年
 タムソン・ホテル
 黒田開拓使長官

逆風，荒天を冒しすっかり遅れて30日半かかったアラスカ号の航旅を終え，遂に？曜日の夕暮横浜につきました。

上記は手紙の冒頭である。？は消えて読めないのて、万年暦を利用し，又1月22日までのライマンの毎日の行動を分析した結果，金曜日，つまり1月17日金曜日，日本の土を踏んだのが確実となった。すでに税関は閉り遅くて江戸に行けず，船で仲よくなったドイツ人と上陸し，ドイツホテルでラーガーを飲んだり，日本人を妻としている人を訪れているが，誰で，何処で，何をしたのか，文字が消滅して数行は手の施しようなし。

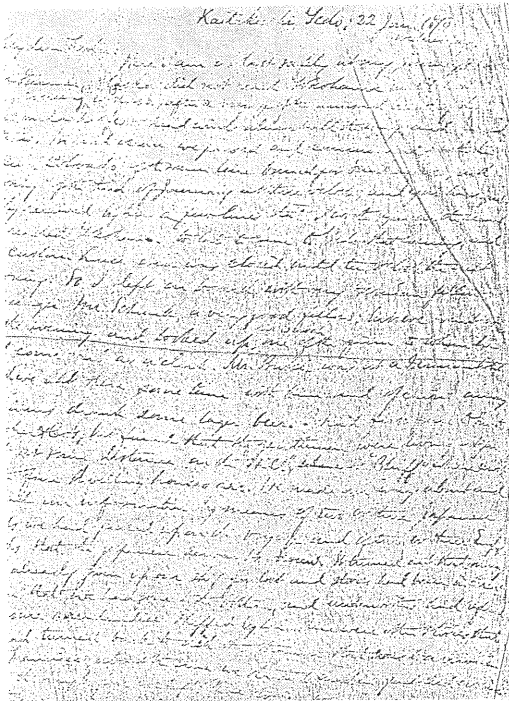
至って簡潔であるが，書面に，すぐにも仕事に着手しようと意気込むライマンの面目が躍如としていて，ほほえましい。この手紙でケプロンがホテルにかけつけ，続いて黒田が訪れ，ライマン江戸新生活がスタートする。詳細は，1月22日付父への手紙に負うところが大きい。

江戸ステーションからホテル行き馬車で2マイルアメリカ人，ミスタータムソンが経営するヨーロッパ風2階建ホテルにめでたく無事到着しました。途中2年前に泊ったホテルの焼け跡を通りました。

黒田への公式書簡と旅費は，歴史と事実を伝えるが，父への手紙は，人間ライマンが躍動し真に興味深い（第4図）。所々文字がうすれたり消えたりして，判読すら出来ない文があるのは残念だが，それにもかかわらず，ライマンの興奮を肌で感じる。

実はライマンの今回の来日は2回目であった。1870年（明治3年）イギリス政府の依頼で，インドパンジャブ地

注3) 森 有礼



第4図 父あて書簡

方の油田調査をし翌年アメリカ帰国の途中日本に立ち寄った。1871年（明治4年）5月14日サンフランシスコから、叔父レスリー^{注4}へ「中国と日本への旅は、すばらしいでした。相当な東洋通になりました」と書いている。又、横浜に着くや、シャツ・パジャマ・ハンカチーフ等、33点を洗濯に出した」メモの日付けが、同年4月20日、江戸ホテル食事付3ドルの領収書は、4月21日、日本を立つ前であろう。4月22日、横浜で、金貨を699ドル86セント小切手に替えている（第5図）。ライマンはこの

時から86歳の高齢で永眠するまで、善きにつけ、悪きにつけ、日本の事を思いつづけて人生を終えたのである。

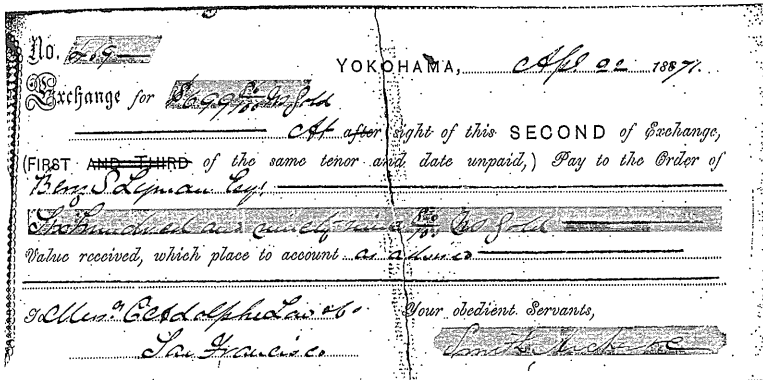
ミスター黒田へ、一筆書いた後……ケプロン将軍が通訳を連れて、ホテルに私を訪れました。間もなくミスター黒田も来られるがと語った数分後に、当人黒田もホテルに到着し、通訳を通し私の無事安着を祝い、ケプロン将軍に繰返し、私の身の回りの世話が、行き届いているかどうか、気を付けていて欲しいと頼んでいました。

当夜、ケプロンは、自宅にライマンを招待、客は、開拓使及び政府関係者と通訳2人、計6人であった。翌日日曜日の朝、いよいよホテルから、芝・増上寺の一角、ライマンの栖に転居し、部屋の様子を、下記の様に描写している。

……部屋は、まだはっきり判らないが全部で五室あり、家具は殆どありません。ただ絨緞がしいてあり居間に椅子三脚、机一脚、テーブル一台、小さな書棚（今朝運ばれました）にストーブ、寝室には、ベッド・タンス・洗面台とタオル掛があります。

その夜、黒田はライマンを主賓とし、開拓使の主要人物を招き、宴会を開いた。総計16人で、黒田が上座に座り、反対側にケプロン、黒田の右側がライマン、向かいがアンチセル、その隣りがホルト、彼は江戸の製材と製粉各所を司る機械運転者頭取、彼の隣りは数名の日本人、ライマンの右側は、日本人の通訳で、その隣りが又数人の日本人、ケプロンの左側は、二人の若いオランダの女性（開拓使仮学校女学校の先生）、ケプロンの右は、モ

注 4) 叔母婿ピーター・レスリー博士（地質学）



第5図 通貨交換証明書

ンロー、そしてもう一人の日本人通訳。ライマンの住居の一間で宴会は行われ、7時に始まり10時に終わったと真に詳細に父へ語っている。ここで一つ加えたいのは、当日の午後モンローとアンチセルがライマンを訪問している。ライマンはモンローを米国より同伴していない。又そのとき受け取ったと思われるアンチセルの名刺の肩書きは、M. D. ANTISELLで、彼はドクターであった。

次の日、日曜日(20日)ライマンの仕事に関して、黒田と会談、黒田側は、二人の首脳と通訳、片側は、ケプロンとライマンで、主にアンチセルとライマンの仕事の受け持ちについて話しあった。後年黒田と不和になり契約更新さえ拒まれるが、父には「ミスター黒田はユーモアのセンスあり、私に特に親切だった。彼は40歳位で、知的でプリンスの容貌を供えている」と好意的書振りである。会談の席上、黒田はライマンが開拓使のアドバイザーとして、ケプロンの次席となるのを希望し、ケプロンは、アンチセル再契約の処置にかかわらず、ライマンの地位は、アンチセルのより低くはならぬと力説している。又ケプロンのアンチセルとのトラブルに言及し次のように書いている。

ケプロン將軍はアンチセル罷免までは、彼とは不和でありませんでした。ケプロン將軍の不在中、將軍がアンチセル再契約の処置を望んでいるとの偽りが伝えられ、將軍を喜ばせようとしてなされたのですが、將

軍はアンチセルの再契約を快く思っていない。

これは黒沢明の「羅生門」の様に、どこまでも、ライマンの「ケプロン・アンチセル不和事件」である。又黒田との会談で、ケプロンはライマンが蝦夷の地質兼鉦山士長であるべきを主張した。アンチセルは開拓使仮学校で教えていると継ぎ足している。

まだこの国の見物はしていませんし、殆ど外出していませんが、昨日の午後、ケプロン夫妻と、ミセス・ハウズ^{注5)}とで、芝のお寺(増上寺)まで行き、徳川大君のお墓をみました。こちらは大変寒く、日本の家屋は開放的で、しかも暖房の設備が貧弱なので、室内はとても寒いです。日曜日は一日の大部分雪が降りましたが、月曜日の正午までに消え去りました。私は心からの歓迎を受けたことばかりでなく今後の全般の見通しについても、非常に満足しています。予期していた以上に、ケプロン將軍を、とても気に入りました。彼は、概して有能で善意の人です。

これが判読したライマン来朝最初約6日間の記録である。

注5) 函館駐在アメリカ領事夫人

<受付: 1989年12月19日>